功徳を積みなさい、と

「徳」というと、どこかモヤッとした言葉ですが、洋の東西を問わずに古くから使われた概念のようです。古代ギリシャではプラトンが知恵や勇気、節制、正義等の徳目を論じ、キリスト教神学では神への完全な愛が求められました。日本人に大きな影響を与えた中国の儒教文化では、仁義礼智信等の徳目を教えることが知られます。これらはどれも命の質を高め、人としての完成形に至るための、身に具えるべき要素とされ、徳を高めることで人々の信頼や神の加護を得、また中国では国を治めるに相応しい人物になるとされました。

ところで仏教には、似た言葉に「功徳」があります。これはサンスクリット語のグナ（guṇa）の訳語で、「ご奉公の功徳で元気になった」等、よい結果を招く力を指します。他の宗教や哲学にもある「徳」との違いは、私たちが自分の知恵で徳目を理解し、それを学習して身に付けるものではないことです。仏教では善い行為にはそれ自体に「素晴らしい結果を招く力が具わる」と考え、これを功徳と呼びます。「善い行為」は仏さまの説く教えです。ゆえに仏が教える修行（功徳行）に励めば自然と徳を積み、修行の報いとしての福の果報を得ます。ご利益は、そんな「功徳ある善行」を実践した報いです。

かつては権力者が競って造寺や造仏、写経等をしました。これも、それらの善行に現在や未来の幸福をもたらす力（功徳）があるとされたからです。法華経は、これら善行の力の元は、御題目に具わる功徳であると教えます。そこで御題目の修行、すなわち御題目を唱えるお看経や、口唱の信心を磨く参詣や御法門の聴聞、御題目で人助けの菩薩行をするお教化や育成、法灯相続、また御題目のご弘通を支える法城護持や布施供養等の外護など、お寺では御題目の功徳を我が身にいただき、幸せの報いを得るためのご奉公を学ぶのです。

ところが最近、昔のように「功徳を積みなさい」と教えるご信者が減ったなぁと耳にします。せっかくの功徳行なのに、仕事や作業の感覚で「当番だからしなさい」「役務だから出るのは当然」「人が足らないので手伝って」等と声がかかるものですから、ご奉公させていただく側も「幸せになるための功徳をいただこう」と思えない。ゆえに喜びがなく、愚痴や不満はあっても笑顔がなく、終わればサッサと帰ってしまう…。気持ちが入らないというのは、素晴らしい講演を聞きながら居眠りしているようなもので、勿体ない限りです。

原因は教わる機会がないことです。ご奉公して「功徳をいただいて良かった」と喜ぶ姿を見せる。ご奉公を勧めて「功徳を積みなさい」と一言添える。そんな基本を疎かにすると、ご信心を学びながら功徳を積んで、健康や仕事、経済や人間関係などに福徳を得、幸せになる人が育ちません。育成に悩む人のヒントはここにあります。

今年も一年が間もなく終わります。年末年始の節目は、心機一転で心を込めて功徳を積むチャンスです。歳末御礼参詣や年越しの除夜法会、元旦会や初御講、また本山初灯明料等、どうか次世代の信徒や子供たちに、「功徳を積みなさい」と教えてあげて欲しいのです。

（松風寺月報　平成 30 年 12 月号）